

分散会6

司会者：仲村 康子

記録者：宇都宮 健太

会場責任者：柳瀬 剛

未来クリエーション（愛媛県）

子ども未来教室

大声を出したり、ボール遊びができなかったりする公園、一緒に遊ぶ兄弟がいない一人っ子、共働きの家庭など、現在の社会は急激に家族構成や社会が変化し、子どもの居場所が減ってきている。

子ども未来教室では、大学生がお兄さん・お姉さんの立場で勉強を教えたり、一緒に遊んだり、子どもに寄り添ったりしながら、子どもたちに楽しい場所を提供している。子ども未来教室を通して、普段は交わらない世代が交流する中で、若者を中心に地域と子どもをつないでいる。今後、地域のおじいちゃんおばあちゃんと交流するイベントなどを行う予定である。



井村 玲華

住友化学愛媛社友会（愛媛県）

地域社会と共に歩む活動 — 子どもたちに知識と経験を伝える循環社会へ

住友化学愛媛社友会は、住友化学の定年退職者で構成する団体で、会員数1100名である。当会は、「会員の絆づくりを目的にした文化・体育・レクリエーション行事」と「地域社会と共に歩む社会貢献活動」を2本柱にしている。後者の地域社会と共に歩む活動は、40年間続いている「地域の清掃活動」等に加え、平成28年及び29年から子どもたちを対象にした「理科教室」と「キッズパソコン教室」をスタートさせた。科学の楽しさ・不思議を知ってもらうこと、インターネットや簡単なプログラミングなどに小さい時から触れることが、子どもたちの知識の成長に有効である。今後さらに顕在化する少子高齢化に鑑み、多世代交流により、高齢者の経験や知識を子どもたちに伝える循環社会づくりに少しでも役に立っていききたい。



小野 英昭
須山 盾夫
野本 敏久

福岡県春日市 なんちゅうカレッジ実行委員会（福岡県）

なんちゅうカレッジ

「なんちゅうカレッジ」は、福岡県春日市立春日南中学校において、土曜日に行われている教育活動である。

「なんちゅうカレッジ」のねらいは、「中学生」が①社会知識を身に付ける、②将来の人生設計を考える契機を掴む、③大人、社会との接し方を学ぶ、④社会生活のルールを学ぶ、「地域の大人」が地域の教育に理解を深める契機とすることである。

住民で組織する実行委員会が企画・運営し、土曜日に地域の多様な分野の名人、達人等を講師に27講座を開催し、春日南中学校1・2年生全員と希望する地域の大人が肩を並べて学んでいる。生徒のキャリア形成や社会性の育成の成果のほか、地域人材の活躍の場となっている。平成14年度から始まった本事業は、今年で16年目を迎える。



神田 芳樹

分散会6では、発表者の詳細（30分）→質問（20分）→全体協議（15分）×3という感じでした。活発に意見がでていました。

発表者→発
問者→質
司会者→司

未来クリエーション（愛媛県）

発表者の話（さらに具体的に）

発： 大学生が先生と生徒・児童の間に立つ「センパイ」という「第3の立場」で、地域の小中学校に出向き、授業中や休み時間、放課後における勉強教室などを通して児童・生徒と交流している。先生の勤務時間が増加する中、生徒の状況を把握し、問題解決することが難しくなっている。そこで我々大学生が距離感の近い立場で生徒と接することで、生徒一人ひとりの状況を把握し、先生と連携をとることで、学級・学校運営の円滑化を促進し、一人でも多くの児童・生徒に学校生活と勉強を楽しめる環境づくりを目的としている。

～質疑応答～

質①： 未来クリエーションの活動拠点は？

発： 愛媛県松山市の清水地区と東京都八王子市の南大沢地区にある。

質②： 講師（大学生）や児童・生徒の人数は？

発： 児童の数は、約50～60人。内訳は、小学校低学年が60%、中・高学年が40%となっている。主に清水地区・小野地区・愛大附属小学校の児童等が参加している。講師（大学生）の数は、約50人～60人である。愛媛大学の学生が中心に行っている。

質②： 課題は？

発： 安全面と認知度である。安全面は、大学生が児童に必ず付くようにしているが、100%安全ではないと感じる。また、現在は、清水小学校に未来クリエーションを認めてもらい、活動を継続しているが、まだまだ認知度が低いように感じる。認知度を高めていき、講師（大学生）や参加者（小学生・中学生）をさらに集めたい。

～最後に司会・全体から～

大学生の自主的な活動がとても素晴らしい。やる気に満ち溢れたこのような若者がどんどんこのような活動に参加し、子どもたちと心を通わせてほしいとフロアから意見があがった。

住友化学愛媛社友会（愛媛県）

発表者の話（さらに具体的に）

発： 社友会のスローガンの一つ目は“健康と親睦で生きがいを見出そう”、そして二つ目は“支えあい地域に根ざした社友会”である。この二つ目のスローガンは、私たち一人ひとりが社会への貢献を念頭に置いて行動し地域とともに成長することを目指しているものである。

活動は、HPに詳細がある。[\(http://www.ehime-sy.server-shared.com/\)](http://www.ehime-sy.server-shared.com/)

～質疑応答～

質①： 活動の内容は？

発： 様々な活動がある。社会貢献活動として、奉仕活動がある。清掃活動を約30年間継続している。場所は、田上神社の清掃剪定活動、八幡神社奉仕作業、西中金栄地区会員による滝の宮清掃奉仕等、様々な場所の清掃活動を行っている。また、「作品展示会」を新居浜市のあかがねミュージアムで行っている。会員の作品（書道・日本画・洋画・写真・陶芸・美術工芸等、多岐にわたる）の展示会がある。今回の発表は、小学生対象の理科教室の紹介を行っていて、

新居浜市内の小学校や公民館で理科教室を行っている。小学校の先生は多忙であり、理科実験が苦手な先生もいるため、そのお手伝いの一つとして活動している。理科離れの一つの対策にでもなればと思う。

質②： すばらしい活動である。現場の先生方からは、とてもありがたいと感じる。他の市町村でも行えないか？

発： そのようなお言葉は、ありがたい。現在、多数の新居浜市内の小学校から要請を受けている。しかし、会員の数にも限りがあるため、他の市町村までの出前授業は、なかなか難しいことが現状である。そのため、先生の研修の場の開催を少しでもできればとも考える。

質③： 活動を行い、よかったと感じる時は？

発： 実験を行い、子どもたちから「うわー」、「すごい」等の歓声や実験を行っている時の子どもたちの輝く目が自分たちの行動の原動力となっている。

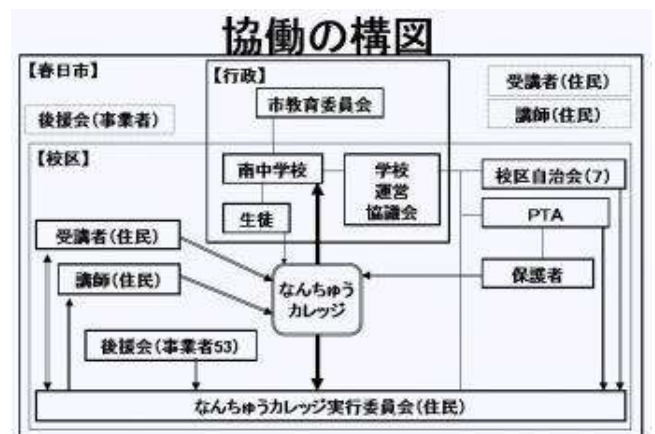
～最後に司会・全体から～

このような活動を継続してほしい。すばらしい取組である。他の市町村でも活動してほしいという要望が強くあがった。

福岡県春日市 なんちゅうカレッジ実行委員会（福岡県）

発表者の話（さらに具体的に）

発： 春日市の全小中学校では、コミュニティ・スクールを導入して、学校・家庭・地域三者による共有基盤の形成と児童生徒の市民性の育成に取り組んでいる。その一つが、なんちゅうカレッジである。また、中学校1・2年生の全生徒を対象として、総合的な学習の時間として、学校の教育課程に位置付けている。



質①： 大変だったことは？

発： 講師を探すことが大変だった。なかなか講師が見つからず苦労した。だが、地道に入づてに紹介してもらうことで、現在27個の講座を開くことができています。

質②： 成果や将来の展望は？

発： 成果としては、子どもたちの人間関係づくり、コミュニケーション能力の力が付いた。また、なんちゅうカレッジを経験し、成長し、大人になり、なんちゅうカレッジにもう一度協力するという循環もでき、すばらしい活動になっている。最後に、これまでに培われた人と人との関わりを維持し、さらに高めながらなんちゅうカレッジを通じて、「校区の子どもたちがすくすく育つ地域」、「地域で子どもを育てる地域」、「地域と共に子どもを育てる地域の学校」、「超高齢社会においても住民が生き生きと活躍できる地域」を目指していきたい。

～最後に司会・全体から～

このような活動を他県でも取り組んでほしい。子どもたちのキャリア形成に役立つのではないかという意見が出た。

残りは、名刺交換や雑談になりました。大変、勉強になりました。

分散会7

司会者 菊池 好彦
記録者 森本 一豊
会場責任者 吉田 和仁

八幡浜市地域おこし協力隊

地域おこし協力隊による離島「大島」での地域活動

八幡浜市では、平成27年度より、総務省の「地域おこし協力隊」制度を活用し、市内3地区に協力隊を配属して地域活動を行っている。

その1地区、八幡浜市唯一の離島「大島」では、高齢化が著しく地域存続の危機が迫っている。島の魅力を多くの方に知ってもらうため、地域資源を活用して交流人口増加を目指している。その他にも、島内行事への参加など協力隊として地域でどのような活動をしているか報告した。



乗松 稔明氏

ふたみ図書プロジェクト

図書（室）をきっかけにしたコミュニティづくり

利用者の少ない図書室を拠点に、「図書（室）をきっかけにしたコミュニティの場所をつくろう」と、行政と住民協同で活動している。

主な活動は、蔵書の整理やディスプレイの作成、移動図書の導入、時節ごとに図書をキーワードにした講座や読書会などである。

団体を立ち上げて約1年で、少しずつ近隣の小学生を中心に利用者が増えてきた。一方で、目標である「図書（室）をきっかけにしたコミュニティづくり」には至っていない。また利用マナーなどについても、いくつか課題がある。



渡部 正輝氏

三世代交流シェアサロンめばえ

子どもたちの思いの実現「めばえっこ商店」の活動を通して

ひとりで子育てを担うのではなく、地域や社会の様々な世代が共に育み助け合い、子どもたちのもつ可能性や感性を引

き出せる温かい大家族のような場所を創りたいと思い、始めた。めばえっこ商店には、子どもたちが思いを込めて作ったものが並ぶ。お店を始めるのに必要なものや大切なことは、みんなで話し合い、みんなのチカラをおかりして、みんなでカタチにしていく。お店を出しても、お手伝いをして、お買い物をして、子どもも大人もみんなが楽しめる夢のつまった場所である。子どもたちが本物のお金を手にしながら「はたらくこと」「お金の大切さ」を体験し学べる場所である。そして、地域の方や多世代との関わりをもつことで、文化や知恵の継承はもちろん、笑顔がいっぱいの魅力あふれる街づくりにつなげていきたい。



半田 英里氏

質疑応答

ふたみ図書プロジェクト

Q1 司書の資格をもっている人は？

→公民館にはいない。伊予市の図書館の方に協力をしていただいている。

Q2 学校関係にもいると思うが？

→把握はしていない。

感想・意見

→ポップコンテストをしてはどうか。小・中・高生に応募してもらう。

→ビブリオバトルというのもある。本を紹介し合って、分かりやすい本を観客が決める。

→新居浜市では、ユネスコスクールというのがある。図書室をもっと活用しようとする取組がある。読みたくなるようなしかけをするのもいい。

→除籍は大変な作業。子どもたちに呼びかけてやらせてみると、自主的に活動する。また、子どもたちが読みたい本を選べるようにしてはどうか。

→子ども読み語り隊という活動もある。

→もっと司書と連携をする必要がある。

→先輩を母校に連れて行って、読み聞かせやなどの活動をしてみるのはどうか。

→学校や教育委員会とももっと連携を試みるのもよい。

→対象が広い。

→展望は、双海のみんなが笑顔になってほしいということ。だから、対象は絞らないようにしている。

→中・高生になって読む時間は少なくなった。中・高生にも参加できるイベントをぜひ。

→絵本をぜひ読んでほしい。そこから新たな発見がある。

八幡浜地域おこし協力隊

Q1 宿泊施設はあるのか？

→1件あるが75歳のおばあさんである。県内のつり客が多い。海水浴場にはしていない。運営もしていない。自己責任で泳いでいる。

→海のきれいさが魅力。それを生かす取組を考えている。

Q2 イベントは年に何回？

→クルージング・カルトナージュ・ノルディックウォーキング

○ 公民館は八幡浜に17。島には1つ。学校跡地を産業おこしや避難場所に利用している。

○ 若い人は島を出て市内のほうへ行く。

Q3 地域の人の活動拠点、メンバーは？

→ 受け入れ団体がないので、自分で関係作りをした。公民館活動に主に入り、新しい活動などを提案している。

Q4 大島の行事なのか？また、その時の子どもたちの参加した時の様子は？

→ 公民館の行事の一つである。大島は受け入れる側である。子どもたちは「楽しそう」「また来たい」という反応。

Q5 手ごたえとしてはどうか？

→ 受け入れがほしいと市に要望している。島の人が本気でやらないと市は動かない。しかし、観光客を呼びたいというなど意識が変わり始めている。

三世代交流シェアサロンめばえ

Q1 めばえっことは随時？

→ イベントなどで声をかけていただくと出店する。

Q2 商品は？

→ 前日や当日作っている。

○ すばらしい取組。職業体験になる。

Q3 メンバーはどのように集める？

→ SNSで募集する。1年かけて育てていく。

現在2期生を集めた。幼稚園から4年生。4年生は企画もできる。

Q4 惣開小学校に統合されるが、子どもたちはどうしたいと思っているか？

→ 若宮小学校では、先生方が手厚く指導してくださっている。若宮小学校に行きたいという思いはある。

→ 子どもたちがうまくいけるように願っている。

→ 今から惣開小学校との交流をしておきたい。

○ 小学校跡地を拠点にアイデアを出してがんばってほしい。

○ 母校がなくなるのはさびしい。地元に戻ってこれる活動をしているのはすばらしい。

感想・意見

→ このきっかけを大切にしてほしい。若いお父さんを取り込んで、違う学年でも引き継いでもらう。

→ 規約を作って、全校に配って、組織作りをして総会をしてはどうか。

→ 広げるのは難しい。地道にこつこつと広げていく。

→ 大人が地域の子どもの育てるといのがなくなりつつあるので、社会教育が難しくなってきた。考えなければならぬ時期に来ている。

→ 考えずに動くことも大切である。

分散会8

司会者 渡部 良仁

記録者 松田 裕樹

会場責任者 赤石雅俊

西条市

瀬戸内海に浮かぶ無人島、カブトガニの繁殖地の干潟、国定指定跡の古代山城跡など自然豊かな楠河地区で公民館を「プラットフォーム」の核とし、各種団体が連携し自然体験活動を行っている。子どもたちが地域の大人や異年齢の者と豊かに交流しながら、地域の教育資源を生かした体験活動を実施している。公民館がこれまで行っていた事業の中に「プラットフォーム」を組み込み、実行委員会を組織した。

実行委員のメンバーは、中学校の校長先生や教育委員会や連合自治会長、愛護班長、看護師など多岐に渡っている。公民館を拠点にNPO団体を含め地域の様々な団体の協力を得ることができた。



越智 洋子氏

伊予市

若返り玉手箱 ～移住交流で学校を救え～

少子化に悩む愛媛県最古の現役木造校舎をもつ翠（みどり）小学校。この学校を守るため、子育てファミリーの受け入れに取り組む「まちづくり学校 双海人」。その支援により移住ファミリーの受け入れが広がり、大都市のマンモス校から小規模校へ移ってきた子どもたちは豊かな感情、自主性と地域愛を育んでいる。

ふるさとを愛し、楽しく学び、みんなが幸せになる。翠小学校の翠力（みりょく）では、のびのび環境、自然が豊か、本物体験、木造校舎、開かれた学校運営、多様性。開かれた学校運営では、地域住民が学校の授業（総合的な学習の時間など）の中に積極的に参加している。多様性では、地元の子どもと校区外通学の子どもや移住してきた子どもなど様々な価値観の子どもが兄弟のように親しく過ごしている。少ない人数だからこそ、友達とのつながりが強くなり学校生活を楽しんでいる。また、大人達も地域の活動に積極的に参加することでコミュニティが広がってきた。



本多 正彦氏

新居浜市

生まれてきてくれた我が子へ、産んでくれた親へ、生んでくれた親へ、出逢ってくれた友達へ、寄り添ってくれた大切な人へ、そしてずっと頑張ってきた私へ「うまれてきてくれてありがとう」を感じられるようにと願いを込めたプロジェクト。このプロジェクトが人と人を結び、自分と向き合い、地域と繋がるきっかけになると信じている。映画作成を通じて、人を結び、人と向き合い、

人と繋がるということを伝えてきた。伝える側（映画作成のスタッフ）がただ映画を作成するだけでなく、その制作スタッフのためにシンガーソングライターのmomさんを招いて交流会も実施した。そうした取り組みを知った、小学校の校長先生から依頼で学校でも講演をした。また、保護者に向けてトークショー&ライブを行った。目に見えないものを見える形として伝えている。最初は3人のメンバーが今では大人、子ども含めて50名ほどになっている。活動では、働く大人を助けるように子どもたちも一緒になって一生懸命に活動してくれている。これからは、その子どもたちが育っていつてくれることで、その想いが繋がっていくと信じている。



松本 真紀氏

感想

- ・地域によっていろいろな活動があるのに驚いた。
- ・双海町の発表を聞いて、実際に引っ越したいと思った。
- ・発表を聞いて、明日からの活力につながった。
- ・それぞれの活動に共通していたことは、子どもが楽しんでいること以上に大人が楽しんでいる。
- ・この分散会に参加していた人がみんな、地域、地元を愛しているということがよく分かったので良かった。

質疑応答

○活動していく上での活動費用の捻出方法について

- ・国からの補助金や助成金を使う
- ・自主財源の確保（道の駅でピザの販売等）
- ・自分たちの持ち出し



○賛同者を増やすための工夫

- ・公民館から出る広報で募集
- ・学校関係者による広報活動
- ・NPO 団体との連携
- ・身近な人たちから声をかけ、口コミで広がっていつている。定例会で、交流を深めることで賛同者が増えてきた。

○定例会の準備について

- ・不定期で集まって行っている。Line やフェイスブックなどを使って情報共有などを行っている。月に1度程度、実際に会うこともある。

○打ち合わせの時に子どもがいると大変ではないのか？ → 松本

- ・子どもは大人が楽しいことをしていると一緒に考えてくれる。

○地域教育の目標、体験を通じて変化した子どもについて → 越智

- ・まだ、活動自体の日が浅いので目に見える変容はまだ見えない。しかし、参加した子どもは「また行きたい」と感じてくれているので、自分たちの目標に近づいてくれているのではないかなとは感じる。

○地域の人々のフットワークの軽さについて → 本多

- ・もともと、元気な人が多い地区だからかも知れない。地域の人たちが、地元に対して愛着があるので学校行事や地域行事に積極的に参加してくれている。地域の過疎化に対して、地域の人たちも危惧しているので、こうした取り組みに積極的に参加してくれているのだと思う。

○今後の展望について → 本多

- ・移住者の数などにはこだわってはいない。行政目標の達成ということではなく、そこに住んでいる人が笑顔で生活してくれればそれで良いと思っている。今後、高齢者が増えることにより住民が減ってくるとは思うが、住民を増やすことよりもその土地を愛して住んでくれる人に来てほしい。

○参加者の変容について → 松本

- ・Project の参加によって、目に見える形の物ではなくて参加者同士が共感し合えるようになってきた。

○体験活動のあり方について→越智

・今は参加している子どもがお客様の状態なので、もっと子どもたちにさせることも必要なのでは。

○移住者を定着させることが大切なのは。子どもが、大人になって地元で働ける場所を確保しなければ地域の活性化につながらない→本多

・大人になったときには大都市での生活の経験は必要。しかし、いつか地元に戻ってくるかどうかは子ども時代に、ふるさとでどのような生活をしてきたかが重要だと思う。双海でずっと生活していくための生業が必要だと思う。

○体験活動で中学生が参加したのは校長先生の尽力→越智

○移住してきた子どもは地元にもどのような影響があったのか→本多

・地元の子は3人しかいないので、移住してくれたことで友達が増えて良かった。移住してきた子どもにとってもこの環境はプラスだが、地元の子どもたちにとってもプラスになっている。

○地域教育の根っこの部分は、「大人になったら楽しそう」と子どもに感じてもらえることだと思う。今後の活動の予定について→松本

・みんなで楽しめることを第一に考えている。婚活などもしてみたい。



○無人島体験活動

○子どもと妻に対しての夫の振る舞いについて→松本

・夫婦が仲が良いことが子どもに対しての一番の愛情表現になる。お父さんの魅力は、子どもと遊ぶこと。思ったことをその場で口に出すことが大切。

○移住してきた人たち（その子ども）が永住するために→本多

・親がその地元で働くこと。親の働く姿を見て、子どもたちが将来なりたい仕事にしてくれるといい。その機会をどのように考えていくのかは、今後の課題としていきたい。

○子どもの学力について→本多

・少人数で学校生活を送ること功罪はある。中学校、高等学校に進学すると少人数から大人数になるとギャップがあることもある。学力については複式学級が劣るとは思えない。小規模・複式だからこそ生まれる自主性やきめ細かい指導もある。

○翠小に脚光を浴びることで、その周辺の学校に影響はないのか→本多

・あまり影響はない。どこかだけが脚光を浴びているということはない。行事などでは、連合で活動することが多い。



分散会 9

司会者 佐川 良
記録者 清水 大輔
会場責任者 鍵山 直人

双海町 こども教室実行委員会

おもしろ大作戦～地域の歴史資源を活かした講座作り～

戦後途絶えた札所巡りである「地四国八十八か所」は、住民の生活には密着したものであった。ある地域住民の方から調べたいと公民館へ出向かれたことが活動のきっかけである。

史談会で協力を募りプロジェクト発動した。次世代の子どもたちにもつながる活動であるので公民館も協力していった。活動は2年くらい続く、札所を分布図にまとめていった。また、こども教室の中の「おもしろ教室」で取り上げた。ハイキングを行う中で、近所の人にお接待をしてもらった。今後、継続した取り組みにしていきたい。また、地域の中で手つかずものがあるので、今のうちに。計画的に行わなければならない。



隅田 直軌 氏

新居浜市 新居浜西高等学校放送部

高校生が社会とつながる～放送部の活動～

地域の問題を高校生の視点で見つめ直すビデオづくりの中で、インタビュー、意識調査(学生・市民・警察、行政等)を行い、生徒中心で作品作りを行っている。見る人の心を動かして社会問題への関心をもってもらったり、考えてもらったり

苦勞している点として、番組を見てくれない点、地域の間関係のディープな所に高校生が入る難しさなどがある。取材者相手の尊厳を保ちながら公平に客観的に判断する難しさを感じている。

ビデオづくりを高校生が行うことで主体性、計画性が磨かれている。共感力、公正性が見につくように努力している。放送部の活動は、課題発見、解決、発信、達成感がやる気と次の課題の発見につながっている究極のアクティブ・ラーニングである。



新居浜西高等学校放送部

島根県 益田市教育委員会

小学校を拠点化し「スクール・コミュニティ」へ

「豊川地区つろうて子育て推進協議会」が存在している。各学校、PTA、社会福祉協議会、民生児童委員等立場を超えて月に1回程度、子どものためにと話し合いを行っている。

以前から地域の中心にはいつも豊川小学校があった。小学校年々人数が減っている状況であるが小学校、保育園、公民館が隣接しており、地域の拠点となっている。そこへ社会教育コーディネーターが入ることとなった。平成27年にコミュニティースクール認定され、地域の交流スペースを作成し、地域のみんが気軽に集まり、触れ合える場所として活動している。アイデアもたくさん出てきており、様々な活動を一緒に企画をして、地域の方にも手伝ってもらって活動している。交流スペースは、みんなのもとという認識となっており、地域のよりどころとなっている。お互いの得意を分け合う学び舎ともなっている。



市川 恵 氏

質疑応答

双海町こども教室



Q1 何体のお地蔵さんが見つかったのか？

→8 2体6体見つからなかった。記憶をたどって調べていった。昔は縁起ものであったので、持ち帰られたのではないかとも聞いた。

Q2 どのようにハイキングを行っているのか？

→実行委員会形式(こども教室実行委員会)、学校の先生も協力してもらっている。双海3校の交流にもなっている。小規模であるので意義のある活動となっている。ウォークリーのクイズのように行ったので興味をもって行っていた。

Q3 一人の地域の方から始まったが、住民の変化はあったか？

→温度差がある。興味をもってくれた人もいたが、広がりには弱かった。歴史に興味がる方、地域教育に関心の高い方が協力的であった。ハイキングを行うことによって、子どもの声が聞こえるので過疎化の地域はうれしがっていた。

Q4 具体的に語り部をつなぐ方法は？

→伊予市役所としてはまだまだである。内子・大洲は歴史文化を観光としているが、伊予市は弱い。双海では個人的に動いている。今後、全体的に広がってきている。現在は史談会が中心となっている。

新居浜西高等学校放送部

Q1 テーマはどのように決めているのか？

→放送部全体のネタ会でみんなで出し合って決めている。

Q2 部員の自主性はどこまで？

→アポイントメントについては、まず先生へ相談して、学校の電話をつかって行っている。取材相手に会うまでには、様々なことをしっかりと調べて、相手に対して失礼のないように誠意をもって行っている。

Q3 高校と地域とのつながりはどんなことを？

→あかがねミュージアムでの活動である「えがお甲子園」へ参加することによって反響があった。地元公民館が祝賀会を行ってくれた。一つのことからいろいろとつながりができてきている。

Q4 今までに思いが通じなかった経験は？

→。えがお甲子園を出るにあたって、主催は市であるので、市役所へ話を伺いに行った。なかなか人が来なくて大変であった。

→同じ世代にPRすることが大事である。

→実行委員会形式で高校生中心ですると盛り上がる。おやじの会がいい例である。どんどん自信をもって発信すればよい。新居浜をどうにかしよう。現代の問題を解決していこうという気持ちが大切である。

→中学生と地域とのつながりがうすい。どうにか中学生もつながっていければよい。

Q5 発信をもっとすればいいのに (SNS など)

→肖像権、著作権等でハードルが高い。様々なことに対して配慮が必要である。

益田市教育委員会

Q1 社会教育コーディネーターとは？

→元気な地域ということでコミュニティースクールとして認定。そこへ社会教育コーディネーターを配置している。コミュニティースクールの認定のためには、学校運営協議会が設置されていることが条件である。社会教育コーディネーターは地域、学校などの人をつないでいくキーマンである。

Q2 交流スペースを作るにあたって大変であったことは？

→学校のスペースということでデザインなど。やってみてよかったと思うこともあった。

→普通の学校では、壁紙1枚変えることも難しい、学校や教育委員会などの了解が得られない場合が多い。

Q3 中高生の参加、地元の人に参加することによって、工夫された点は？

→社会教育コーディネーターは子どもたちを集める役目をになっており、公民館主事は大人を集める役目である。中高生は定期的にパソコンルームを利用しているので、社会教育コーディネーターがアプローチしている。

Q4 市の職員等と話し合う機会は？

→場は多くないが、個人の働きかけは多い。意見を集約してくれる立場の人がいる。

Q5 規模が小さい学校なので統合などの話はないのか？

→今までに話は出たようであるが、地域は反対していて、どうにかして小学校を残したい気持ちがある。そのような気持ちがあるので、地域の人たちは協力的である。

→地域によっては、地域の反対はあるが統廃合が進んでいるところもある。

最後に

子どもたち、地域のためにも、地域・小・中・高が集えるところが大事であり、様々なかかわりの中で育つ。

また、子どもたち、地域へ対する熱意が大事であり、活動の原動力である。



分散会 10

司会者 土井 宏

記録者 入澤 勝利

会場責任者 小池 源規

久米公民館思い出プロジェクト（愛媛県松山市）

久米思い出プロジェクト

すべての地域にありながら他のどことも違うものとして、「地域の思い出」を位置づけた活動をしています。住民の方々へのマンツーマンのヒアリングやアンケートを行い、地域の思い出の場所や内容を聞いたり、イベントでガリバーマップに思い出フラッグを差してもらったりしながら、情報を収集しました。集めた思い出は、単に地域に蓄積するだけでなく、郷土新聞を発行して、世帯に配布したり（1万2千部、3回発行）、地域の記憶を使ったゲームを作って学習プログラムにしたり、小学生と一緒に壁新聞を作ったりしながら、地域へフィードバックするよう実践してきました。さまざまなプログラムに、地域住民の方が触れることで地域へのアイデンティティが芽生える取組です。



〈 姫井 大輝 氏 〉

西予市野村地域体験活動地域プラットフォーム実行委員会（愛媛県西予市）

平成28・29年度 体験活動地域プラットフォーム形成支援事業

体験活動を通して、自然や文化を理解し、地域に愛着をもつことを目的として、西予市野村地域では、小学生を対象に「ジオパーク探検隊！～惣川・大野ヶ原探検！～」と「ツリークライミング体験と竹で飯ごう・工作体験」を実施しました。これらの活動を通して、子どもたちは、普段見過ごされがちな地域の自然や文化を再発見し、楽しくふれあうことができました。また、年齢の異なる子どもたちが、地域の大人と活動をとにもすることにより、心の成長が促され、積極的に体験活動へ参加する意欲をもたせることができました。



〈 佐尾 優 氏 〉

島根県益田市教育委員会（島根県益田市）

「ライフキャリア教育」が“社会教育”の再生と“地方再生”を進める

「ワークキャリア（仕事探し）」ではなく、「ライフキャリア（生き方探し）」を柱として、益田市の社会教育が学校教育に仕掛けています。小学校での「夢の教室」と「カタリバ」、中学校での「カタリバ」と「新・職場体験」、高等学校での「カタリバ」と市内の若者が研修を受け、各学校のキャリア教育に入り込んでいます。（現在、進捗は全学校の8割）このライフキャリアを柱とした取組により、子どもたちは益田市のことが好きになり、益田の多様な素敵な大人のことが好きになってきています。このマインド醸成こそが、地方創生の基盤をつくると信じています。



〈 大畑 信幸 氏 〉

質疑応答

久米公民館思い出プロジェクト

- Q 子どもたちの興味やくいつきについて教えてほしい。一番どんなところが盛り上がったか。
- A 歴史のカードゲームを作り、ゲームの得点を数えているときが一番、盛り上がっていた。カードを集める中で、その資料を読み、子どもたち自身がの学びを深められたと思う。
- Q カードの内容は誰が作ったのか。内容の指導をしたのか。
- A カードは自分で作成した。都市づくりや自然環境などの観点を軸に、収集したことをもとに作った。
- Q 新聞の配布など、手間がかかったと思う。それに対する反響はどうだったか。
- A すれ違っても挨拶するくらいの方から声を掛けていただいたこともあった。お付き合いができた方からの声は正直、うれしかった。まだ拾えていない住民の方からの御意見は、事後アンケートをとり把握していく。公民館の活動を中心に地域住民と関わってきたが、子どもたちへの関係づくりが十分ではなかったように思う。もう少し早い段階での関係づくりをしておけばよかった。
- Q 総合的な学習の時間などの、学校の学習内容にかぶるところもあるが、どのように計画したのか。
- A 学習指導要領を参考にし、どんな地域でもできるようなプロジェクトに展開してきたかった。小学校4～5年生が対象になるのではと考えていたが、実際、公民館に集まったのは中学生が多く、小学生は2名であった。
- Q 公民館の中以外の活動ではどんなことをしたのか。
- A 4月に東道後温泉春祭りがあるので、その1区画をお借りし、呼びかけなどを行ったりもした。
- Q すごく多岐に渡った発表内容だが、姫井氏個人の活動なのか。
- A 個人の活動である。3年かけて行った。
(フロアより) ヒアリング以外での情報収集として、郷土史を見ながらの情報収集がある。このとき、地域移住民の方の記憶でズレが生じることもある。そんな場合もあると思うが、整合性が合わないときは、すり合わせたりするなど苦労したと思う。
- Q 姫井氏がとらえる“地域らしさ”とは何か。
- A 地域にもアイデンティティがある。建物などの物理的なものもあるが、住民同士の協力心のようなものが地域らしさなのではないかと捉える。
- Q 土木工学科というエッセンスはどんなところで生かされているか。
- A 今回は歴史を主で扱ったが、地質学的なものとして、久米にはお遍路もあるのでそんな視点でもおもしろかったように思う。
(フロアより) 地元に着愛をもつというベースは“記憶”ではないかと思う。地方創成のこれからのベストになっていくのではないかと感じた。

西予市野村地域体験活動地域プラットフォーム実行委員会

- Q ネットワークづくりの難しさはどんなところで感じたか。
- A 今回、関係している方がほとんど、公民館の運営審議会のメンバーであったため、顔見知りであった。理解もあって心強かった。
- Q 国の補助事業ということもあり、1年の予算での活動ではあるが、今後の継続の方法についてはどうお考えか。また、継続するにあたって担当者の熱意や組織の課題など問題は山積しているが、今後の計画があれば、聞きたい。
- A 事業費を頼りにするだけではだめではあるが、こども夢基金などの選択肢も考えている。今後も努力しつづけたい。
- Q 今後、事業を拡大していくためにどんなことを考えているか。
- A 将来的には野村の地区から町へと広げていきたい。5～10年のスパンで広げていきたい。
(フロアより) 西予市はジオパークを前面に押し出し、体験活動や啓発など、市としても様々な取組を行っている。
- Q 継続のこつはなんだと思うか。
- A 信頼関係ではないか考える。顔が見える関係というのを続けていきたい。
- Q 何人の児童が参加しているのか。

- A 11~12人。もっと知名度を上げていく必要がある。
- Q ツリークライミング体験（専用のロープやサドル、安全保護具を利用して木々と触れ合う体験）などは専門の講師を雇って費用がかかるとあったが、もっと無料でできる仕組みは作れないだろうか。
- A 講師代だけでなく、交通費などの問題もある。同じ野村でも距離が離れている。惣川から大野ヶ原まででも40分はかかる。狭い車道で、大型のバスも行きかえない。保護者やスタッフにお願いという方法もあるが、安全面での心配もある。実際、近くに病院などもなく緊急時の対応も考えなければならない。
- (フロアより) 野村にスクールバスもある。そういったものも検討してはどうか。お金をかけずに事業を続けていくという考えは必要。
- (フロアより) ジオパークの体験活動については、行政が関われば無料になるのかという意見もある。全国的にみて、お金の問題で法に触れてしまった事例も聞く。参加費という負担金をかけていく考えも一つである。過去に年7回のプログラムで6500円で行ったことがある。そのときは子ども自身に春先に畑づくりをさせ、秋に収穫して食べるという活動を行った。同時に保護者も巻き込んだ活動も行った。

島根県益田市教育委員会

- Q 新職場体験について、中学生でも企業面接をする意図は何か。
- A 中学校の現場で働いていた時に、生徒はとくになんの希望もなく職場体験で近くのコンビニを選択していた。いい加減な態度で、店先から連絡が来ることがあった。本当のキャリア教育とは何か。職場体験で中学生には覚悟をもってほしい。同時に企業の社長には思いを伝えてほしい。職場体験先である企業の社長自ら会社のPRをし、面接をすることで、学校で働くことへの灯をともし、成長した子どもの姿を見た。またその子どもの成長から企業側の大人自身の変容も見られた。相互の刺激になってほしいと願っている。
- Q 昔、教育現場で保護者（おばあちゃん）からこんなことを言われたことがある。「勉強はそこそこでいい。頼むから育てた親を大事にする子にしてほしい。（地元に戻ってきてほしい）」発表を聞いて、そんな経験を重ねた。
- A 「仕事がない」を理由に帰ってこないという若者を増やしたくない。そのために、人との出会い、縦と横の輪、人づくりの輪を大切にし価値観を広げていきたい。地元（益田市）に帰ってくる子を育てていきたいと思う。そんな“たね”をまきたい。大学を卒業し、結婚し、子育てをするときに、「やはり益田がいいよね」という活動をしたい。「29歳益田帰化活動」をし、能動的で生き抜く力を身に付けさせたい。
- Q (フロアに対して) 宇和島市が益田市と同じように商店街を使って「カタリ場」を行っていたと聞いたが、それが続かなかった理由、益田市との違いは何か。
- (フロアより) 組織そのものが熟さなかったことにより、理解者が増えなかったからではないか。
- A 「カタリ場」のよさは若者たち自身がよさを感じることである。誰もが参加できる「益田人づくりフォーラム2018」を3月3日に行うので是非、来ていただきたい。
- (フロアより) 現在の親はわが子に自分の仕事を見せることがない。地元には「仕事がない」というのはそもそも不思議な話。保護者の働いているところへの職場体験を行ったこともあるが、そんな刺激の場にしてほしい。職業観より人の生き方をみてほしい。
- Q 地域とのつながりは？
- A 地域コーディネーターがいる。公民館を中心にして地域に1つ軸をつくり行っていこうと計画している。
- (フロアより) 私自身、生きる力をつけてきたが「生き抜く力」は身に付けていなかった。あとからは身に付かない。模倣はできるが、今から内面から変えることは難しい。これからの子にはそんな力をつけてほしい。地方の子はある意味チャンスであると思う。地方の問題は山積しているが、それをチャンスとしてとらえてほしい。
- (フロアより) 教育は社会教育、学校教育、家庭教育の3つがある。社会と学校の融合、そして家庭と融合するともっと広がっていくのではないだろうか。こういったふれあいの場が教育の現場であり、大切にしてほしい。

